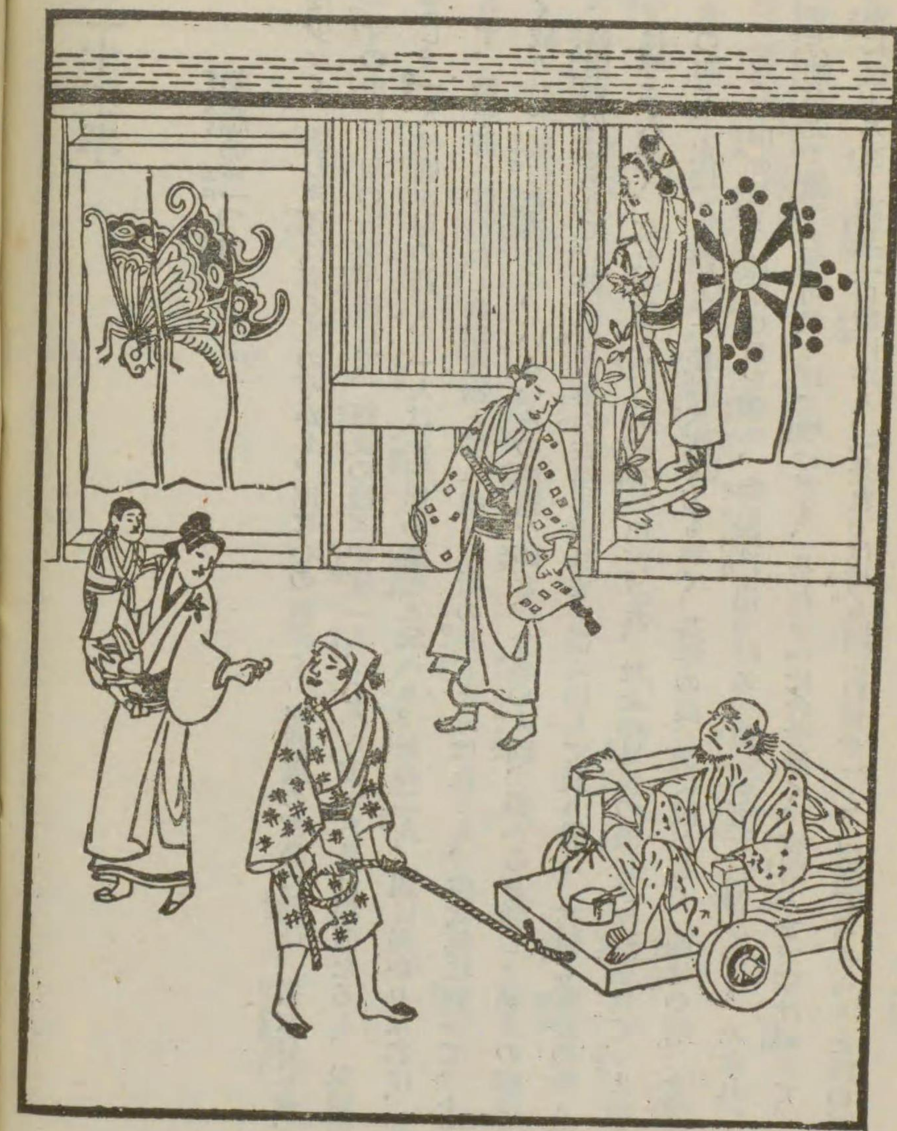
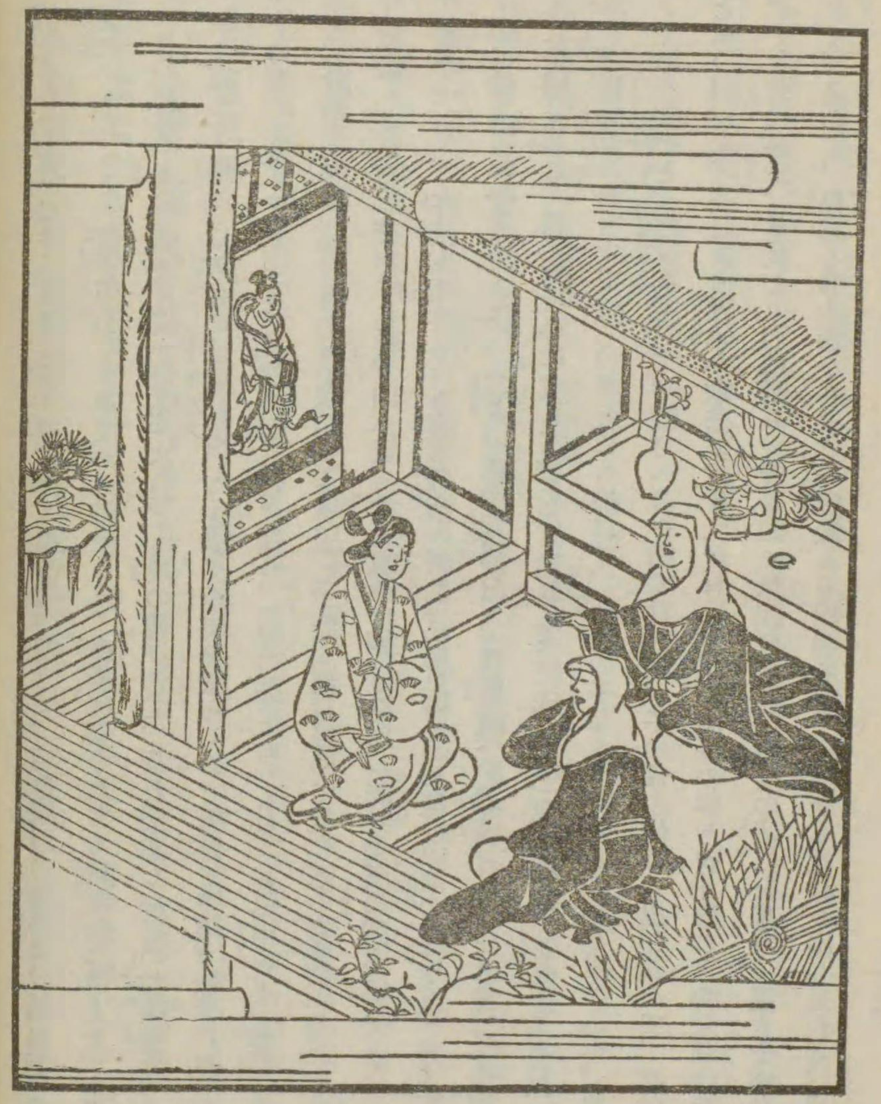


置き、源七甚七故郷を去つて、備前岡山より路銭無くて、此所に足を踏み止め袖乞するに、未だ昔の名残額に見え、色白にして鬢附の奇麗なれば、門立も不思議がりて、「通れ、通れ」の言葉荒く、身の置き所も無く、過ぎにし奢の事ども思ひ出だし男泣の涙、鬱島莚を漏りて、餘所の見る目も恥かし。其頃備前は心學盛んにして、人の心も率直に成り、主人に忠ある人、親に孝ある者は御惠み深く、自ら其道に入りて、國の治まる此時なれば、二人の才覺出だして、足腰の立たざる野臥の非人を語らひ、甚七は片輪車を作りて、七十に餘る老人を乗せて、町筋に出づるより涙ぐみ、「國を申せば安藝國、年を申さば二十三、如何なる因果の報にや、一人の親を養ひかね、面を晒し勸進す、何も御慈悲は御座らぬか」と、聲悲しく誠がましく歎きしに、人施して銭米少しの内に山なして、後は車に積み剰りぬ。源七も年老いたる者を負ひて、其の如く歩るきしに、人皆志を感じて情を掛けられければ、野末に篠竹を圍ひ、朽木の有るに任せて拾ひ集め、棟を並べて庵の形を作り、雨露我家にて凌ぎ、「昨日までは雲を見て臥したる事を思へば、今宵の樂み此上何か有るべし」と、土釜に野澤の水を汲み込み、貰ひし物を一つに炊けば、搗かぬ米あり、新米あり、赤米、眞搗、小豆に限らず、様様の色なして、天目に竹窓、生あれば食ありと、腹膨るるに外の願ひも無し。甚七、老人に按摩を取らせ、終夜蚊を拂はせ、年寄の草臥を容さず、睡れば胴骨を踏み叩き、「とても腰拔役の己れめ」とつらく當るを、源七は格別に勞はりて、「さりとは然様にすべき事にあらず、先づは親と名づけ、然かも其の蔭にて今日の身の上を助かねば、其恩は忘れじ」と懇ろに當るを、却つて甚七猜み、其れよりは笹戸一重の中を隔てて、松火の取り交はしもせざりき。天誠を照し善惡を咎め給ふにや、甚七何時と無く人の慈悲を受けかね、渇渇に成りぬ。源七は日に増し心の儘に勸進ありて、後は雨風の時は出でず、此の老人を實の親の如く孝を盡しぬ。隣なる親仁の是れを見て、世を歎き、甚七を恨み、「今日限りと舌食ひ切つて果つべし」と胸を定めし。此人抑もは賤しからず、越後にて名の有る侍、仔細あつて浪人の後、身を隠し、今淺ましく成りぬと、昔物語を甚七が留主の折から、源七に聞かせて、是非も無き泪を溢し、「我れ空しく成りて後、何惜しからねど、せめて骸を犬狼のせせり捜さぬやうに、影隠して」と頼まれけるにぞ、一入哀れ増さりて、「自然の事ありとても其の氣遣ひはし給ひそ、我れ此の所に在る中は惡しくは取り置き申すまじ、少しも心に掛け給ふな」と頼もしく云ふにぞ、老人手を合はして拜み、「さても、さても嬉しや」と袖に玉を流しぬ。斯かる時、旅人と見えて馬乗物を吊らせ、用ありげに佇み、此の老人の面影を暫く見定め、「橋本内匠様か」と取り附きぬれば、「金彌か」と親子の縁切れず、是れにて逢ふ事の喜び限り無し。「我こそ武州に下りて、隨分身躰を稼げども、有り附き遲く、彼方此方を見合せしに、望み協ひて先知五百石にて東國方へ相濟み、此度暇申し上げ、御迎に參りしに、五十日の訴訟なるに尋ねかねて、日數重なりしに、今日爰にて逢ひ奉る事、武運の盡きぬ驗」と喜びぬ。老人此程の難儀語り給ふにぞ、涙干す間は無かりし。斯かる時、甚七歸りて是れを驚きぬ。金彌取つて押へ、「情知らずの己れ、此儘措く者にあらねど、命を行末に自然に思ひ知るべし」と、此庵を崩し、昔の野原と成し、「源七は此度の志を感じ、我れ抱へ申すべし」

と、今一人の乞食も老足なれば、駕籠に乗せ東路に下りぬ。殘る者とて、滅形合器、貝杓子、古筵の、朝露夕に風の身を責め、甚七が悲しさ。此事聞き傳へて、其後は所を追ひ立てられ、猶行先迫りて、其年の雪の頃、播摩の書寫寺の麓にて立ち窘みて死にける。

枕に殘す筆の先

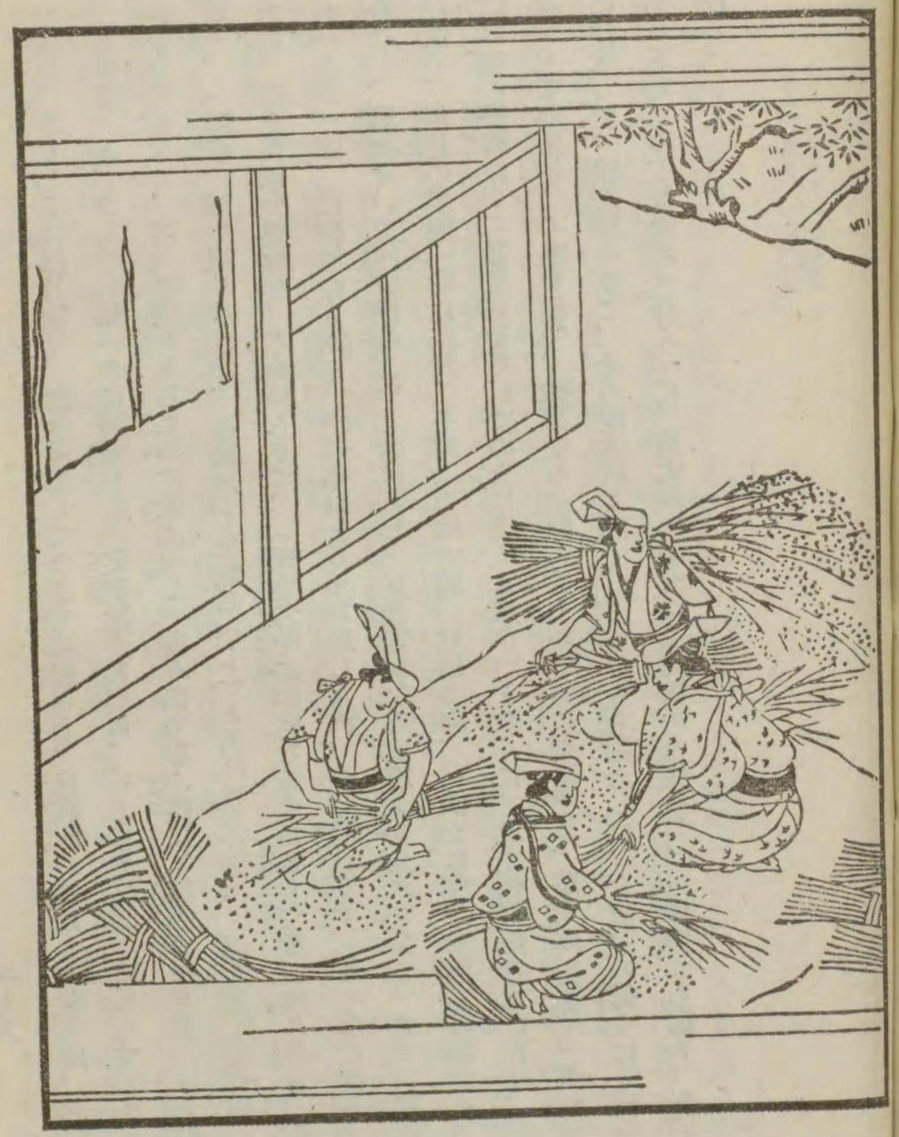
都には今四十の内外を構はず法躰して、樂隱居をする事專らに流行りぬ。頭丸めしとて金さへ有れば、色里の太夫も其れには構はず自由に成る、川原の野郎も猶遊山に變る事無し。世のむつかしき目に逢はぬが、此德何にかは換ゆ〔ふ〕べし。されど女心は愚かにして、娵子に家を渡すこと何時までも吝みぬ。京も田舍も見るに聞くに其通りなり。土佐の畑〔幡多〕と云ふ所に鰹屋の助八とて、獵船を仕立て出す者ありしに、賢く世を渡る海の上を心に納め、次第に分限に成りて助太郎と云へる子を持ちける。一人も獨りからと利發にして、親の氣を助け、諸人の讃められ者、親の身にしては一入嬉しかりき。十九の時同じ所の娘を見立てて、何不足なく娶に取り、此上に思ひ殘せし事も無く、母屋の裏に座敷造りて、助八是れに引つ込み、萬づの鎰を助太郎に渡し、商賣は律義なる手代二人後見させければ、此の身代鬼に金持たせ、根强い事隱れ無し。助太郎夫婦間の好き事を、二人の親限りも無く喜び、此上に孫の臭を見る事を願ひ、未だ振袖の身なれば、下下も我儘出して、寡所そこそこに始末の事も心許なく、母親幾度と無く見舞ひて、末末まで氣を着け給へば、あまたの下司ども奉公を大事に影無く働きぬれば、萬事艫の廻りて、「舟問屋の勝手は、是れまで持つた女房樣の御飯貝」と云へり。朝夕可笑しき事ばかり仰せられ、御年は寄られても御志わつさりと、何れも行末賴もしく、身を任せ、骨を惜まず働きける。されども娵の習ひとて、是れ程惡しからぬ姑を嫉み、春雨の降り續き、物の寂しき曙に、「久久の部屋住居、今と云ふ今氣を凝らしぬ。御愛しさ限り無きに思ふ中の別れ路、浮世とは斯かる事ならん」と、長枕の端に書き殘し、「男の夢に若しも見られぬ中」と、寢卷ばかりの亂れ姿にして、此宿を忍び出で、身の行末は定めず成りぬ。助太郎目覺めて枕に筆の形見、「是れは」と男泣、大方ならぬ歎き、各驚き尋ねけるに、山本近き比丘尼寺に驅け込み、「此身出家の望みは無くて、唯だ世を捨つる」と云ふにぞ、「仔細あるべし」と樣樣詮議の折節、皆皆爰に尋ね値ひ、庵の主によくよく此の人を預け置き、宿に歸りて此事を申すにぞ、二人の親達安堵して、其後迎へを遣はしけるに、更に歸る氣色無し。助太郎此女を戀ひ焦れ、親の事は外に成して彼の寺に行きて、夫婦は二世と戲れ、日數を重ね、宿に戻らず、科無き母親邪見の名を立てける。其れにも構はず、一人の子なれば不便とばかり思ひ込み、兎角は娵、我を煩さく思ふ故ぞと、終夜物案じて、我さへ身を捨てければ、子の命の代りと思ひ詰めて、觀念し、心地惡しきと云ひ出だし、其日より湯水を飲まず、十九日目に果敢なく世の夢と成り給ふ。助太郎は時節の死去と歎かず、女房は喜び、其れより宿に歸り、昔の如く世間を勤め、一人の親仁をも耳の遠きを幸ひに、有るに甲斐なく押込めて、臭見る事も無かりき。一歲餘りも程過ぎて、書置せし枕取り出し見れば、母親の筆に



して書き付け置かれし。「世を見るに、娌年寄りて姑と成る。人の心の恐ろしきに、優しき狼を恐れる。子の可愛さ餘りて、惜しからぬ身なれば、千歳も散らぬ花娌子、命を參らす」と書き殘されし。是れを聞き傳へ、人の附會缺けて、自ら取り籠りて在りしが、夫婦刺し違へて果てける。

木陰の袖口

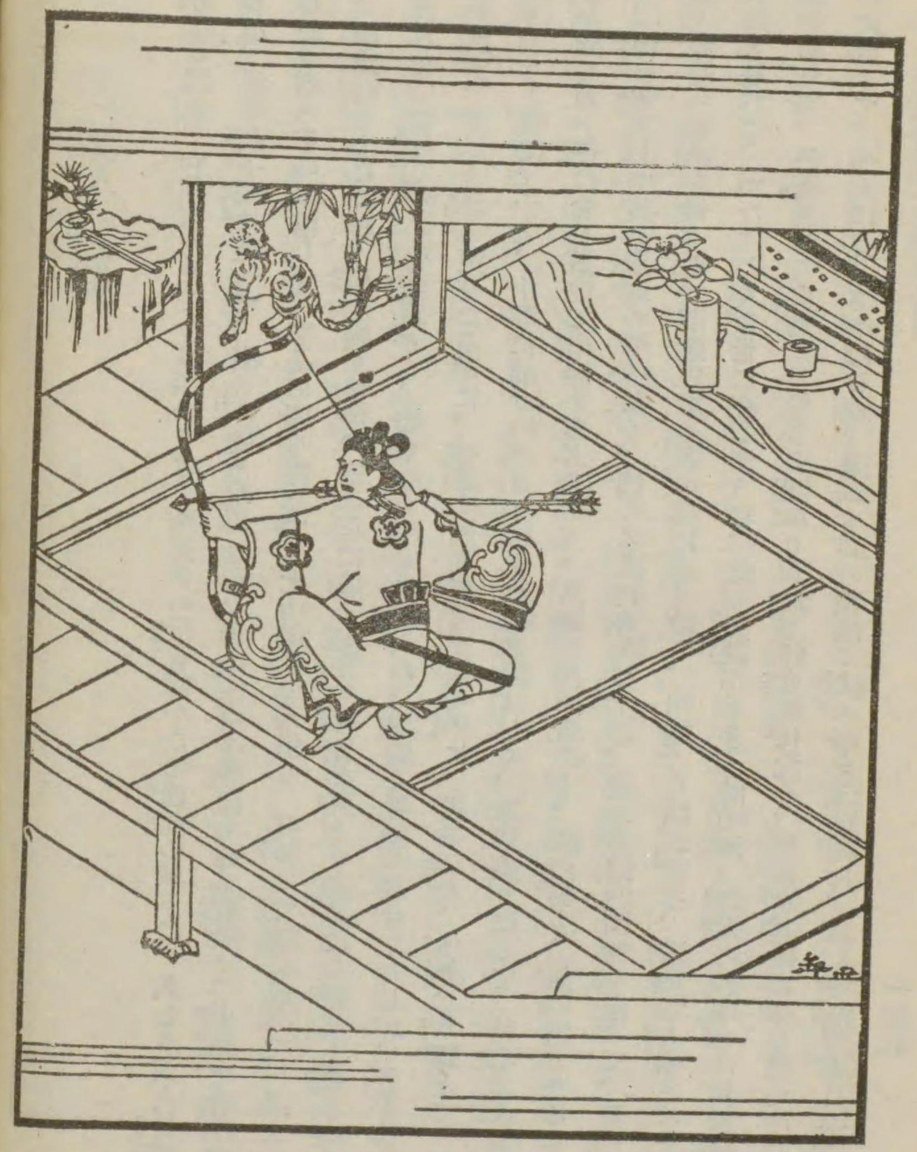
疊り無き身を疑はるる程世に迷惑なる事は無し。天誠を照し給へども、其の時節を待たず身を失ふも悲し。心の浪風立つも、人の云ひなしにして是非無き事あり。越前國敦賀の大湊に、榎本萬左衞門とて、百姓ながら商人半分の者あり。隨分賢く立ち廻り、此所の市に出店、都の春の花を爰の秋に咲かせ、馬引野人を招き、活牛の目を拔き、龜井算などは中括に巾着の口を締め、世間の人を腰に提げる程なれども、仕合は思ふに儘ならず、する程の事左前に成りて、資本を耗らし裸に成りぬ。必ず惡事は續き、田畠も取り目無く四五年の荒野と成りて、皆御年貢に賣り取り、悲しき中にも無用の智惠あり貞を、日頃出だし置き、理無く賴まれ、人の公事沙汰に掛かりがましき者とて、後には親類さへ音信不通に成りぬ。猶又連れ添ふ女房にも思ひを寄せ、氣を惱ませて、月日を過ごし、次第弱りに成りて、二十六の五月の末に浮世を闇と成りぬ。二人の中に萬之助とて、未だ乳房を忘れぬ一子ありて、歎きも一入止むこと無く、其れより四十九日までは、香花を取りて、萬之助が枕蚊帳に寄り添ひ、暫しも夢は結ばず、泣き出す時殊更に悲しく、摺粉、地黃煎を興へ、膝の上に抱き上げ、「鷄鷄鷄」と搖れども泣き止まず、夜は明けず、今の切なさ、「子と云ふもの無くて有らなん」と、口鼻が事を思ひ出して面影に立つ。男ばかりにして住み憂き事を思ひ當りて歎き、身の苦しき時子を捨つる藪垣を忍び出で、半町ばかり、野末なる念佛寺の門前に行きて、辻堂の内に萬之助を捨て置き、立ち歸れば、人の身を離れて、板敷の冷ゆるを覺えて、聲を上ぐれば魂も飛び出で、又懷に入れて、「捨てねばならぬぞ」と云ふ時、夜も明方に成りて、軒端なる雀の囀りて、己が子をさまざまに育むを見て、「たまたま此身を受けて此志口惜しき」と、また宿に歸り、五十日の弔ひ精進をも上げて、其日より里里へ通ひ、商の糟買を身過の種として、片方の負籠に萬之助を入れて行く道すがら、涙を片荷にやうやう一村に入りぬ。此里優しくも是れを勞はり、色色此子の人なる事を申しぬ。折節庄屋の廣庭に女ばかり茶事して集りしが、此中に似合はしき後家ありて、何れも取り持ち、輕輕しく緣組を急ぎぬ。此の女房見苦しからず、然かもしほらしき心底、夫婦の取組喜ぶにあらず、近き頃に子を失ひ、其の乳上がりもやらず有るなれば、人間一人助くる思ひを成して、我子異らず萬太郎を撫で育て、世の稼ぎを大事に、夕に織りて朝に賣り、櫛して三人ともに飢ゑず、寒からず、程無く家富みて、其後は下下もあまた使ひ、萬太郎も十六に成りて、角前髮の取り姿態も是れを羨みぬ。されども形に心は違ひ、不孝第一の惡人、年中親の氣を背きしを、繼母よろしく取り成し、密に意見する中にも、人の娌など使るを頻りに申せば、却つて惡心を起し、日頃の恩を忘れ、繼母の難を企み、追ひ出すべしと思ひて、父に申せしは、「迷惑ながら、云はねば天命を背くなり。母



人我への戯れ、さりとては面目無く、隨分堪忍して今までは包みし。自然傍から見し人あらば、罪無くて指差されんも無念」と、まんざら無い事に涙溢しぬ。父親驚きながら、「よもや然樣の事あるまじき」と云へば、「お疑ひ尤もなり、其の證據をお目に掛け候ふべし。家を出で給ふ體にて物蔭より見給へ」と親仁を外へ出し置き、「庭前の柿の盛りなれば、稍色づくを取るべし」と云ひけるにぞ、母も立ち出で眺められしに、萬太郎、好き首尾を見合せ、木蔭に入りて、「頸筋背中に如何なる虫か入りて身を痛めける、疾く取つて給はれ」と云へば、母親何心も無く、左の袖口より手を差し入れ、暫く探して、「何も手に當らず、されども心許なし、着物脱いで内を檢めよ」と云はれし。父親遙かなる生垣より是れを見て、さては其れよと一筋に思ひ定め、年月の恩愛一度に忘れ、子細は云はで暇の狀出され、「俄かに飽かせ給ふは如何に。惡しき事あらば日頃の好誼に、一通り仰せられての上は恨みも無き」と歎くに、萬左衞門聞き入れねば、「是非に叶はぬ身」とて黑髮切つて家を出で、殊勝なる法師と成りぬ。眞に惡事千里、萬太郎が所業、誰れ云ふとも無く所に沙汰して、諸人憎み立て、身の置き所も無く、上方へ立ち退きしに、七里半の道中にて時ならぬ大雷神、鳴り落ちたるとも覺えず行く中に、萬太郎を乘せたる馬ばかり殘りて、口曳男立ち歸り、此の不思議を語りける。

本に其人の面影

無佛世界なる國里、和朝末末まで今は無かりき。殊更世の掟も靜かなる松前の城下に、久しき浪人岩越數馬と云ひしが、近年孔子頭に變へて、名も夢遊と改めける。世に住めば夢にも遊ぶ暇無く、虫藥を合はせて今日を暮しぬ。寄る年の口惜しく、奉公の望も絶えて、七十歳にて入道し、其後は丸腰に成つて、武士の貞附もせず、櫛着物の上に縮緬の單羽織を掛け、三十年に成る編笠、折目を裏より紙子にて綴くり被れば、日影者と云はれて、腫物切疵の膏藥賣りて、姿も心も町人に成りぬ。内儀も歷歷の息女なりしが、昔を捨てて朝夕の米を炊ぎ、手足も自ら荒れたる宿に、是非も無き年月を送る中に、男子二人、作彌、八彌とて、悲しき中にやうやうと育て、十七、十五に成りぬ。さすが生れ附き麗はしく、若衆盛りにして、執心の人絶無く、門に市を成しぬ。後は命を掛けて作彌を忍ぶ人あり。八彌を慕ふ者あり。此の美少、氣の通りたる事、衆道の只中、情を本として其の道理の辨へ深く、惱める人に心を移せど、親の夢遊油斷無く護りて、氣の毒なる戀の關、儘ならぬ身を恨みぬ。夢遊程無く名の夢に成り給ひ、作彌、八彌が悲み、殊更母人歎きの止む事無く、世間も恥ぢず、かなはぬ人を世に在るやうに、餘り氣疎かりき。此の形、二人の若衆とは格別違ひ、背高く痩せ枯れて、色蒼ざめて貞長く、常さへ醜かりしに、此度愁に沈み、髮頭を其儘に身を捨てければ、淒まじげに成りて、他人は見るさへ嫌ひぬ。是れも其の程無く夫の事を云ひ死に、哀れや無常野に送り煙とは



成しぬ。其夜は雨降りて物寂しく、近所に人の歎きを構はず、月待して音曲の數數過ぎて歸るに、臆病者ども何か目に見えける。「作彌、八彌が母人の幽靈來る」と假初に云ひ出し、其後は「我も見し、人も逢ひつる」と、由無き取沙汰をして、夜に入れば往來止まりて、所の騒ぎと成れば、作彌、八彌が身にしては、世の外聞口惜しく、兄弟寢覺にも是れを忘れず、其折から窓の開音ありありと、母親の面影庭に認め、親子の中ながら恐ろしく、兄の作彌は手を合せ、「など成佛はし給はぬ、さりとは淺ましき御事や」と、涙を袖に浸しける。弟の八彌甲斐甲斐しく、枕に有りし半弓番ひ放ちければ、形は消えて颯と光あり。立ち寄りて見るに年經りし狸の鼻筋より射通し、未だ息の荒きを止め刺して、騒ぐ氣色も無く取り置きける。「是れは此所より東の宮山に住みて、今まで如何程か人を惱ましけるに、此後野道の仔細あらじ、此度の功八彌なり」と、「古の頼政、秀郷にも劣らじ」と是れを讃めざる人は無し。此事國主の沙汰に及び、文武の達者立ち會ひ、詮議の有りしは、下下に思ふとは格別なり。兄の作彌再び見えし母を悲むの所、是れ武士の實ある心底に感じ入られ、「當分二十人扶持下し置かれ、末末御取立あるべき」との仰せ渡されたり。「弟八彌事、變化にもせよ、親の形と見て、是れに手づから弓矢の敵對、不孝の志深し」と、御取上も無く、此國を立ち退きける。

本朝二十不孝卷四

本朝二十不孝　目錄卷五

胸こそ踊れ此の盆前
筑前に浮世に迷ふ六道の辻屋
八人の猩猩講
長崎に身を汚す墨屋
無用の力自慢
讃岐に常の身持ならば長生の丸龜屋

古き都を立ち出でて雨
奈良に金作の刀屋

本朝二十不孝

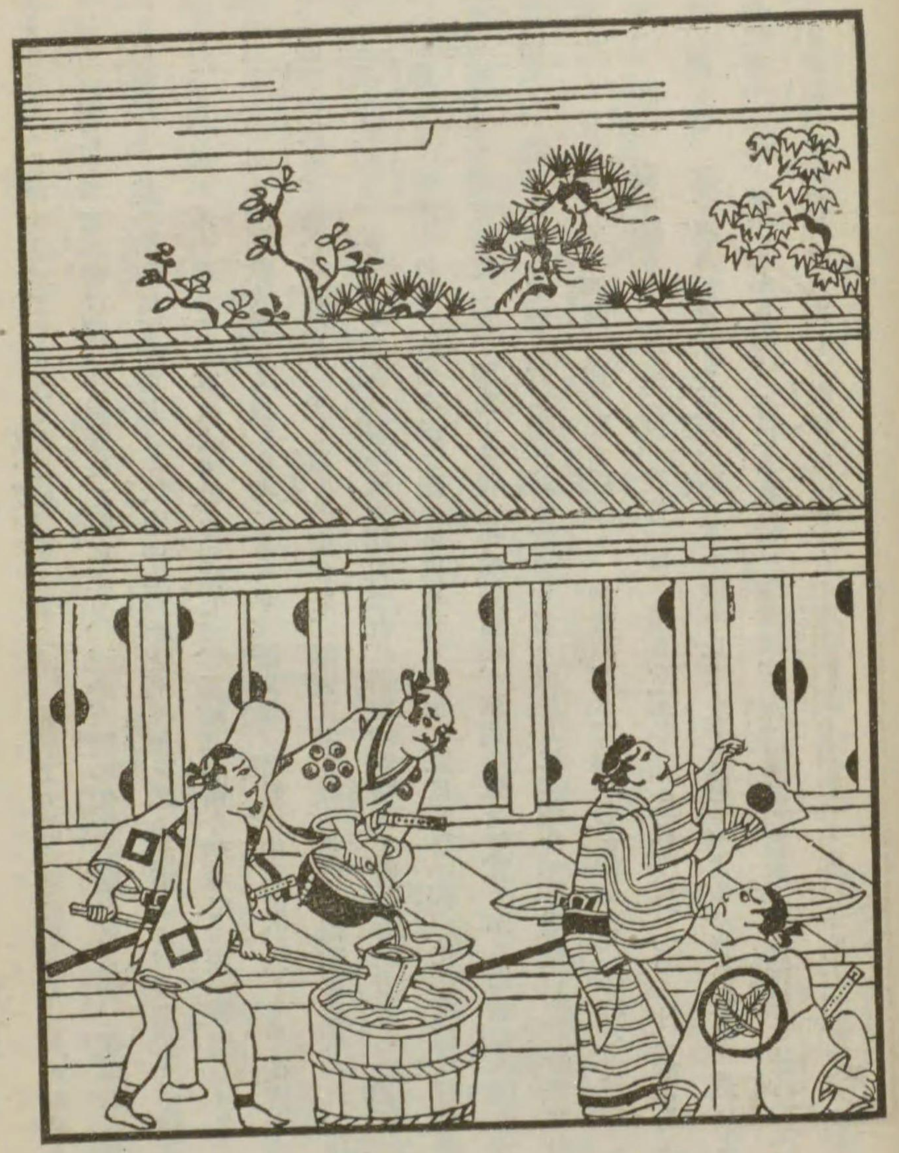
胸こそ踊れ此の盆前

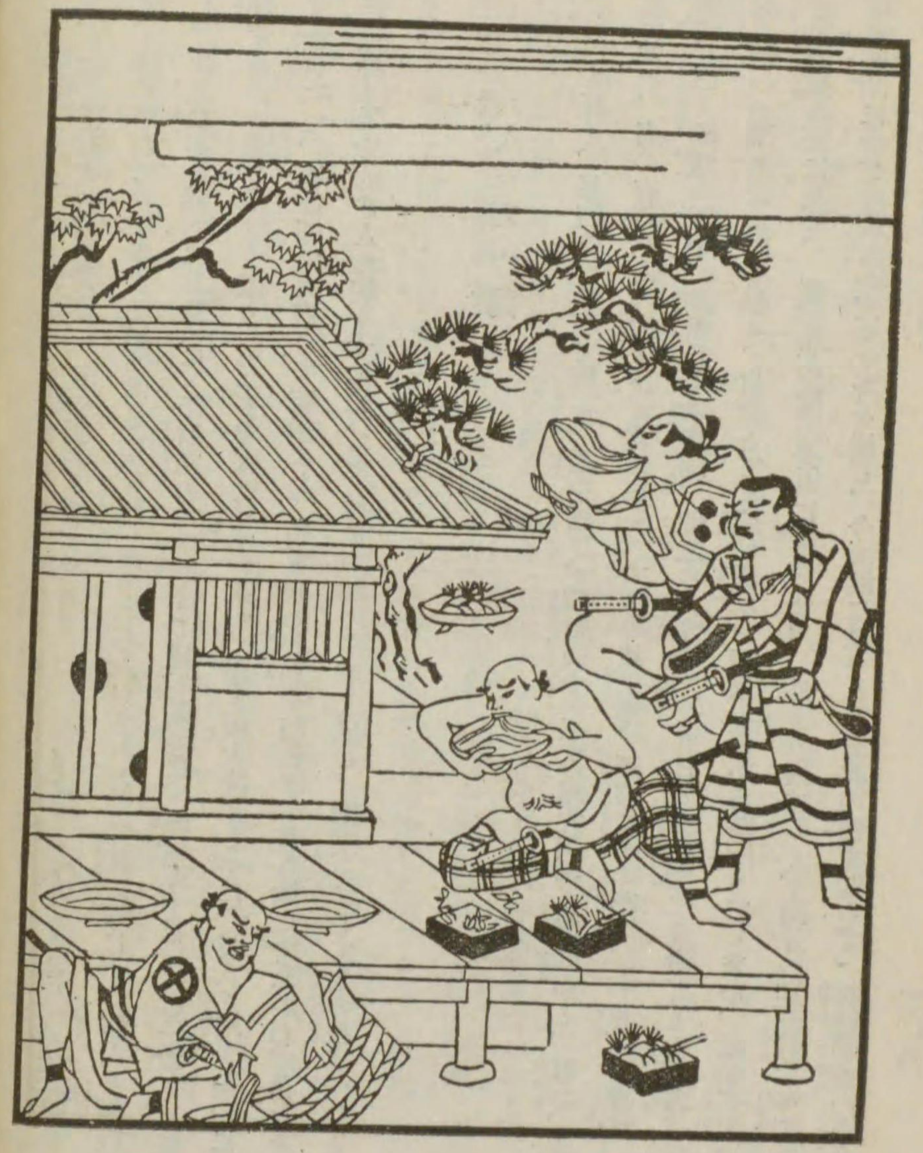
桃や櫻や梨の實、是れぞ蓮の葉商ひ、七月十三日の曙、夕暮は、麻幹の焚火して、世に亡き魂を祭る業の哀れは秋なり。露に涙に兩袖の湊、筑前國福岡の町はづれに、辻屋長九郎と云ふ船乘ありしが、長長筋骨を痛ませ、次第に老の浪立ち弱りて、彼岸に眠る如く盡きぬ。其跡を後家樹を取つて、世帶を能く持ち固めける。子二人ありしが、惣領は長八郎、次は娘にて小さんと名づけし。是れには入壻を取りけるに、長八と心を合せて、親の時に違はず、大廻の渡海を乘りて、一人の母親を二人して介抱みける。思へば波の上の仕合定め難く、内證の惡しきは阿波の鳴戸より渡りかね、盆も正月も宿にて年を取る事無し。此の節季も留主なから、借錢の淵は許さず、賣掛したる人人庭に立ち並び、節供前とは格別、否でも應でも、百貫に塗笠一蓋、母親せがむにぞ、身を置き所無く悲しく、戻らぬ壻を怨み、「せめて斷り文なりとも下しぬれば、各樣の御腹の立ため事ぞ」、手を合はして詫言、さても、さても切なく、「錢が一文御座らぬ」と入物開けて、箱崎の明神を誓文に入れて、二人の者の歸るまでの斷り、やうやうに聞き分け、四十五六人の掛乞、とても濟まぬ事に、提灯蠟燭の費へ算用して立ち歸りぬ。其中に博多より通商人、「味噌酒の賣掛、取らでは歸らじ」と一

人後に殘り、角無き鬼の貞附して「埒があかぬと鍋釜拔く」と、廣敷に座を組みて、何時と無く眠りの出で、人の物云ふも現に聞えぬ。母親、他人の有るとも知らで、「我れ程淺ましき者、又あるべきか。連合の佛棚も飾らず、蓮の飯の祝ふべき始末も無く、束木も絶えて、今朝よりは雨戸を毀して燒くなど、煎じ茶切れて、煙草無く、灯火の油も事缺き、娌が轆轤引より雫を瀝みしが、今の間の光にて頼み無し。是れより先に命消えたし」と、母の歎きを構はず、娘は庭に下りて、身振に色料遣りて、明日の晩よりの踊の習し、「如何に若きとて、さりとは心無く、世の思はく、身の程も恥おぬべし。汝が年は十八、娌十六なれど、世間の思ひ遣り有りて、あの如く身を捨てて内證を隱し、親里へも是れを知らせず、斯かる前後を凌がるるは、女の鑑にも末末まで知らすべき愛しき人なり。未だ此春緣組して半年も經つや經たぬに、衣類、敷銀、手道具までを無くして、娌なればとて面目無し。汝、あの人がやうに志も變るものか」と云ひも果てぬに、娘は穿きたる雪踏を親に投げ付け、不斷の寢間に行くを、母も今は堪忍ならず、手許にありし爪切取つて立たれしを、娌抱き止めて、やうやうに是れを詫び濟まして、片蔭に立ち忍び、美くしき髮壓の挿櫛笄を拔き出だし、玉子色の帶を細き組帶に仕替へて、此の三色持ちて出でしが、暫くありて歸り、右の袂より錢百四五十取り出だし、左の手に鹽鰒五つ、索麵二把、懷より白き餅を出だし、姑に與へければ、四五度も戴き、泪を流し、「此の思ひ何時報ずべき。嬉しや其方の御志」と丸團扇にて娌を扇ぎ立て扇ぎ立て喜ばれし。掛乞、宵よりの事どもを段段見て袖を浸し、「斯かる優しき女の有るべきか、さても、さても」と感じ、闇がりより出でければ、各是れを忘れて驚き、「夜の明くるまでましてから、只今才覺も成らず」と又斷りを申す時、掛乞、涙に昏れて「不孝なる娘も有るに、此の娌子の心入、さりとては肝に銘じて、何んと讃むべき言葉も無し。此上ながら懇ろにし給へ」と、財布の口を開けて錢二貫三百、細金五十目ばかり、有るに任せ「此の娌に進ずる」と云ひ棄てて歸りぬ。孝ある故に天の與へ、憂き所を凌ぎし中に、長八も壻と一つに、思ふままなる仕合にて、再び國元に歸りて家榮えし。娘と娌の善惡を語れば、長八胸に居るかね、是れを追ひ出し、壻には外より宜しき人の娘を子に貰ひて、始めの如く夫婦と成し、猶變らずして生の松、千代とも契を籠めける。

八人の猩猩講

浪の皷の色も好く、長崎の湊にして猩猩講を結び、樞村の中に松の尾大明神を勸請申し、甘口、辛口、二つの壺を並べ、名の有る八人の大上戸、爰に集る。大蛇の甚三郎、酒呑童子の勘内、和東坡の藤助、常夢の森右衞門、三人機嫌の四平、釣掛升の六之進、性急の久左衞門、九日の菊兵衞、此者どもの參會、元日より大年まで醉ひの醒めたる時も無く、何時とても千秋樂は、酒飲み掛かる時唄うてしまひ、兎角正氣の有る中は、身を酒瓶の底に沈め、萬づ世の樂み是れに極めける。外より羨ましく、隨分の遊び好、一盃なる口の男、此の夥間に今まで幾人か交りて身を崩し、今も酒に飲まれし者其の數を知らず。折節曇前の小倉より此

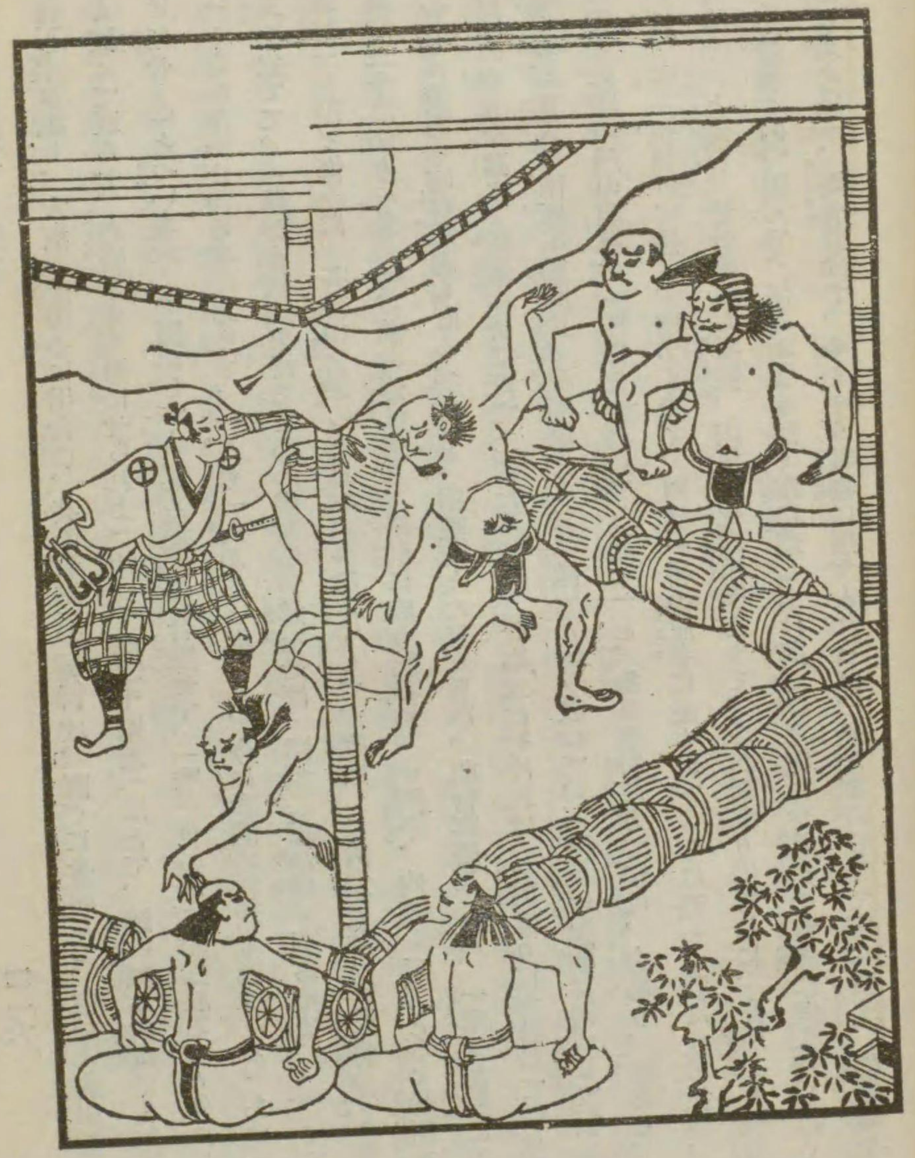


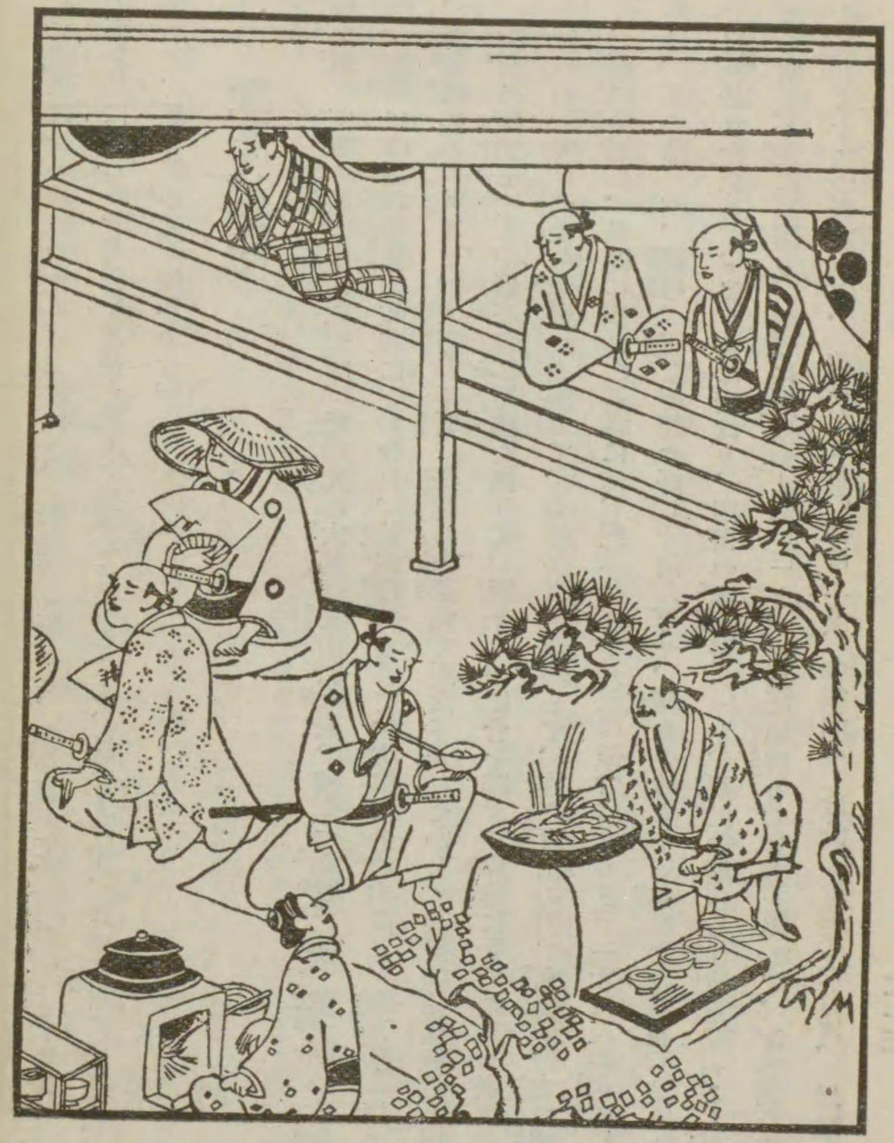


所に宿を引きて、島繪を書きて世を渡る墨屋團兵衛と云ふ者、先祖より酒の家に生れ、「あから飲め」と云はれて此方、終に上戸に出會はず。十九歳にて都に上り、三十三間の矢數酒咽を通る勢、星野勘左衛門、和佐大八が弓勢にも、其の道道にて劣らじ。「天下の上戸」と名も橘と云ふ酒屋より、金箔置きの慰斗肴、是れを出しけるに、金の釆心地して、其れより飲み自慢して、長崎は酒所を望みて、盃店出しける。此所の下戸並と云ふが、外の國の飲大將にも負くる事にあらず。團兵衛、猩猩の中へ亂れ入りて、夜晝十三日の續け飲み、强者の交り、弱い所露はれ、少し草臥れ附きて、無理に我を立つる時、母親異見せられしは「さりとては、大酒を止めよ、其方が父親團右衛門も不斷好まれ、碁會の座敷にて宵より明方までの酒宴、内島休ト と云へる鍼立と、當座の口論、さのみ云ふ程の事にも有らぬを、互に醉ひの紛れに、次第に言葉荒く、刺し違へて可惜浮世を果てられしを、兩方とも世上の笑ひもの、草葉の蔭まで宜しからぬ名のみ殘り、女の身にさへ口惜しく、孫子に傳へて酒と云ふ物一滴も飲ませじと思ひしに、親ながら儘ならず、汝幾度か人の云ふ事を聞かず、世に勝れての酒興、命の程も危なし。向後留まりて母が心を休めよ。然れども俄かに止む事も成るまじ。此の一夏を斷りて、日に三度、夜に三度の限りを定め、一度に五合づつ、二日一夜までは許す」と有れば、團兵衛、親を睨み付け、「其方の煎じ茶を飲み止まる事は成るべきや。世の樂み、是れより外は無し。酒に捨つる命、何惜しからぬ。今にも我れ往生せば、沐浴も諸白を浴せ、棺桶も伊丹の四斗樽に入れ、花山か紅葉の洞に埋まれたし。春秋の遊山、人の吸筒の滴り掛かれる願ひも有り。後世さへ斯く想へば、況して現世に此の樂みを止めまじき」と、猶猶飲み明かし、醉ひ暮れて、五日、七日も續けさまに寢て、世の事を外に成しぬ。是れを思ひと成りて母果てらるるにも、枕を上げず、此の死目に逢はず、遥かの後に夢醒めて、歎くに甲斐ぞ無かりき。

無用の力自慢

行司唐團を翳して四本柱の中に立てば、勸進元の大關は丸山仁太夫、續きて和歌之助、蔦之助、寄關には扉閉右衛門、關脇には鹽釜白藤、左右に立ち分れ、前相撲始まりて、次第に形の山高く、金比羅の祭にあまたの見物、讃岐圓座の所狹なく、上方の手取、在郷の力業見て面白さ是れぞかし。其後は相撲流行り出で、里の牛飼、山所の柴男までも、緞子の二重廻を搔きて、四十八手に骨を碎き、片輪になることも厭はず、無用の達者を好みぬ。爰に高松の荒磯と名乘りて、力ばかりを自慢して、昨今取出の男、丸龜屋の才兵衛とて歴歴の町人、兩替店出し、世間に知れたる者には、慰みながら是れは似合はざりき。「夫れ人の玩弄には琴碁書畫の外に、茶の湯、鞠、楊弓、謠など聞き好し。何んぞや、裸身と成りて五躰危なき勝負、さりとは宜しからず。自今是れを止めて、良き友に交はり、四書の素讀習へ」と、親仁分別らしき意見、「こんな事が耳に入れば一兩年も後に家讓り、萬づに關はぬものを」と、母親は男勝りの智惠を出して、才兵衛を密かに招き、「も其方も十九の春なれば、花見がてらの都に上り、金銀溜めしは此んな爲めなれば、島原に行きて





太夫を殘らず見盡し、大坂の芝居子に出合ひ、其の若衆氣に入らば、直ぐに身請して、三津寺新屋敷とやらに家でも買ふて取らせ、心安き立寄所にせられよ。此度千兩二千兩遣へばとて、跡の減る内藏でも無し、首尾は母に任せよ」と巧い事云ふて聞かしても、才兵衛一圓合點せず、「唯だ世の中に相撲取るより外に何か遊興無し」となかなか止むる事にあらず。一人も一人からと悲しく、今は教訓の言葉も盡きける。あまたの手代聞き耳を立てて、「斯かる親達を持ちて心の儘なる色遊をせば、浮世に思ひ殘す事あるまじ。さても若且那の惡物好」と深く悔みぬ。其後は力業の意見云ふ事ならずして、彌增しに肉食を好み、筋骨逞く成りて、十九の時、三十ばかりに見えて、前の形は變り、格別に成り給ひぬ。一門中、内談して、とかく緣組を取り急ぎ、「宜しき妻あらば自然志も直るべし」と、相應の人の息女貰ひ、祝言事濟みて後、一度も部屋に入る事無く、首尾の惡きを歎き、乳參らせて育て上げたる姥に、此事云はせければ、「男盛りに力落しては口惜し。弓矢八幡、摩利支天、南無不動明王、身が燃えて女は嫌」と云ひ放つて、可惜花娌を斷て物にして寂しがらせ、我れ獨り寢間の戸の明暮、「相撲より外に樂み無し」と、毎日修行募りて後は、力あり、術あり、荒磯と名乘れば、尻に帆掛けて逃げ、相手も無く、四國一番の取手に成りぬ。「今は恐らく我に立ち並び、手合せする人もや」と廣言、皆皆憎みし折節、山里に夜宮相撲ありて、才兵衛罷り出でしに、在所より强力進み出でて、才兵衛と引つ組んで、何んの手も無く宙に差し上げ落しける程に、捨舟の荒磯に埋もれし如く、大方は眞砂に煮え込み、胴骨碎けて、やうやう乘物に搔き入れられ、憂き事に逢ひて宿に歸り、樣樣養生する程に捗らずして、我と心腹立てて、少しの事に人をあやしめければ、下下恐れて、後は病家に行く人無く、勿體なくも親達に足を摩らせ、大小便取られ、冥加に盡きし身の果、親の罰當りと名乘りける。

古き都を立ち出でて雨

奈良坂や時雨に菅笠も無く、手貝と云ふ町より夜を籠めての旅出立、鷄も我れと鳴き比べして行くは誰が子ぞ。刀屋德内と云ふ者の悴、諸藝に器用なりしが、鋼鐵反へ廻り、拔鞘持つての喧嘩好、親に幾度か袴を着せ、常にも不孝なれば、目狹き所より云ひ立て、久離切らせて其里を追ひ出しの鐘の鳴る時、春日野を後に、「何時か仕合せ好く歸り三笠山も、今が見納めと成りなん事も」と、何んとやら悲しく大明神を恨み、「氏子は千金にも代へ給はぬとの御事、金子一歩も無くて、遙遙の東路に下るを、哀れと問ふ人も無し」と、獨言の浪に聲ありて、「佐保の川を打渡りて」と謠を門門にて謠ひ、勸進して、やうやう四十七日目に御江戸に着きて、麹町六丁目に請人宿の九助と云ふ方へ、朋達、狀を附けしを賴みに尋ねけるに、細かに樣子も聞かず、「爰許稼の爲めとや、其の若盛りにては何を致されても、口過程の事は氣遣ひ無し。さて先づ何を望み給ふぞ。少しの資本あるか」と尋ねしに、貫緡に十八文、殘る物とて米八合、德三郎も返事しかねて赤面し、迷惑相なる樣子を見て、亭主も通り者、「金銀あれば此處へは下られぬ筈なり。其れを儲けにこそ」と合點して、情を掛けぬ。「先づ此家吉凶と思はれよ。今まで何程と云ふ限りも無く、諸國の久離切られを請

け込み、首尾好く歸宅せぬも無し。其方も追附仕合あるべし。其中は我等を親と思はれよ。さて一兩年は奉公致させ、其後は分別あるべし。先づ出替りまでは僅かの棒手振なりとも致されよ。後、大名に成つても其れ身に附いてゐる物では無し」と、霜先の朝道を急ぎ、四谷の町はづれに里人を待ち、大根の出買して、夕に賣りしまひ、「昔の樂みを今思ひ當れり。或日、雨風の烈しきに身を厭はず賣り出で、芝の土器町の末に、小家がちなる寂しき所に廻りしに、板屋疎らに、しのべ竹の菱垣頽れ掛かり、北窓を御文殊更の清書にて貼り塞ぎ、門柱に「關川内匠宿」と用に立つ手にて張札、浪人らしく見えて、内は枯れ枯れに、名は仰山に知らせけり。此の草戸開けて、十四五なる若衆、麗はしき形を、何時髪撫で附けし風情も無く、此の寒空に切切の絹給一つに成り、細纒の帶して、鞘剝げ、柄の切れたる大脇差にて、雪踏草履片し片し穿きて立ち出で、我れ呼ばるる程に立ち歸れば、物云はぬ前に涙を溢し、懷より汗手拭の半穢れたるを取り出し、「是れに其の大根少し換へて欲しき」との願ひ、聞くより物哀れにて、「換ゆ〔ふ〕るまでも無し、易き御事」と、一把提げて内に入れば、此子の二親と見えしが、過ぎにし夏の紙帳を身に纏ひ、小升横槌を枕として、目ばかりうごつき、「嬉しや、其れを食ふて今日の命を」と、洗ふ間を待ちかね、夫婦手に觸れて、親仁は、やうやう一口かぶりて、跡は棄てられし。母は「思ひながら咽を通らぬ」と、手に持ちながら涙に沈まれし。德三郎是れを見て、さても淺ましき有樣と、思はざる袖を絞り、「如何なる故に斯かる憂き事に逢はせ給ふ」と尋ねしに、此の若衆、問はれて猶悲しく、「我我は仔細ありて長長浪人、斯くも武運の盡きぬるものか、此の七日八日は二人の親達に湯を參らすべきも新絶えて、堅固なる生れつき、其儘に見殺すことの口惜しき」と語れば、親仁枕を上げ「愚かなり、虎之助、知らぬ人に何を申すぞ、默れ。御所柿の良きは百につき何程か、鴨は番で幾ら程か、其の八百屋に問へ」と、此身に成りても石流昔を忘れぬ僧上、聞けば痛はしき中にも可笑し。德三郎は其れより何んと無く宿に歸り、米味噌看を調へ、彼の家に急ぎ、門の戸を開くれば、最前の若衆闇がりに泣く聲怪しく、「晝の大根賣なるが、心許なし」と尋ねけるに、「母は七つの鐘の鳴る時、夢の如く果てられ、親仁は只今息絶えける」と云ふに驚き、近所にて油を調へ、見るに哀れ深し。虎之助灯にて二人の亡骸を、母は虎之助に負はせ、父は德三郎肩に掛け、野墓の煙と成し、其夜は虎之助が伽して難儀の始終を語り、「此度の御恩、命の中には送り難し」と大人しく云ふにぞ、德三郎、奈良にて親達への如在、身に應へて悲し。其れより十日ばかり毎日見舞ふ中に、生國信濃より歷歷の武士尋ね給ひ、段段樣子を聞きて、「年月の事ども、さぞさぞ」と涙に目は開き給はず。折節德三郎居合せしを、「さても類もしき心底、武家にも珍らし。此の虎之助は某が實子なるが、十一歳より關川内匠方へ養子に遣はしけるに、永の浪人の中、孝盡せし事、我子ながら神妙なり。いざ國元へ」と伴ひ、德三郎には金子百兩賜はり、末末の事まで申し合せて別れける。其後、德三郎は通町に店出して、商の道廣く程無く分限に成りて、南都より二人の親を迎へ、朝夕孝行を盡し、人の爲めと成り、慈悲善根をして直ぐなる世を渡りて、日本橋の邊りに角屋敷次第に家榮

え、昔の宗良刀、今金作にして箱に納め、永代松の枝を鳴さず、此の御時江戸に安住して、猶悦びを重ねける。

貞享三暦
丙寅
霜月吉辰
江戸青物町　萬谷清兵衛
大坂呉服町八丁目　邑田三郎右衛門
同平野町三丁目　千種五兵衛板

昭和二年八月十五日印刷
昭和二年八月二十日發行

日本古典全集第二期
西鶴全集
第六
【非賣品】

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎
東京市麹町區永樂町一丁目一
丸ノ内ビルディング
株式會社日本古典全集刊行會代表者
發行者　關戸信次
東京府北豐島郡長崎町一六二
印刷所　新樹製版印刷所
印刷者　高瀬清吉

發行所　東京市麹町區永樂町一丁目一
丸ノ内ビルディング
株式會社日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二

編纂所　東京市麹町區富士見町五丁目九
與謝野寛方
日本古典全集編纂所
電話九段二一一〇

55
176

550
176

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black